

鳥取大学所蔵・青島遺跡出土の縄文土器について

高田健一¹・矢野健一²・馬上昌大³・鈴木大輔²

On the Jomon Pottery from Aoshima-site : Collection of Tottori Univ.

Ken-ichi TAKATA¹, Ken-ichi YANO², Masahiro BAJO³, Daisuke SUZUKI²

はじめに

青島遺跡は、山陰地方で最初に縄文土器が発見された遺跡として学史上著名である。明治末～大正年間に土器や石器などが採集されてきたが(梅原 1922 など)、1943 (昭和 18) 年に島の南側で水田造成が行なわれた際に多量の遺物が出土し、遺跡の存在が明確になった。また、子持勾玉の存在などから古墳時代の祭祀遺跡としても知られている。

1960 年代後半になって、島の南側が公園化される際に発掘調査が行なわれ、縄文～古墳時代にかけての複合遺跡であることが改めて知られるようになった(とっとり考古談話会 1965, 1967)。鳥取県東部では、この頃までに知られていた縄文時代の遺跡はごく少なかったため、1990 年代以降の資料充実に至るまで、青島遺跡の縄文土器はこの地域の縄文土器編年を考えた上で重要な位置を占めてきた。

既往の出土資料の多くは鳥取県立博物館に収蔵されてきたのであるが、それらの資料と表裏一体をなすものとして鳥取大学所蔵資料があることは、ほとんど知られていない。

近年の発掘調査によって、良好な縄文土器資料が大幅に増加したため、学史的意義は残るものの、青島遺跡出土資料の重要性は相対的に低下したと言わざるを得ない。その一方で、既存資料の再整理・再評価が不十分なために、古いままの認識が固定化し、更新されない弊害もある。従来、青島遺跡は縄文時代後期以降

の遺跡として知られてきたが、後述するように、鳥取大学所蔵資料中には少なからず中期段階の土器片が存在する。近年の鳥取西道路建設工事に伴う発掘調査によって、青島遺跡の周辺でも中期以前に遡る遺跡の存在が明確になりつつあるが、これら最新の成果を検討する際にも、必要な手がかりを提供しうると考える。

本稿では、縄文土器を中心に、鳥取大学所蔵資料の紹介を行なう¹⁾。今後の研究の一助となるならば、幸いである。

1. 青島遺跡の位置と周辺の歴史的環境

青島遺跡は、鳥取平野西端部の湖山池南岸近くに位置する青島に所在する(図 1-1)。島の南側を中心に遺物が出土しているが、北側にも遺物採集地点が散在するため、ほぼ全域を遺跡として認識しておく方が妥当であろう。青島は、南北 700 m, 東西 300 m, 周囲 1.8 km ほどの小島で、凝灰角礫岩などからなる河原火砕岩を基盤とする。池の南岸から約 200 m の位置にあるものの、水深 2.5 m までのやや浅い部分が島の周囲と池の南岸部をめぐっている。湖底地形の解析と湖底出土の土器から、弥生時代の一時期に半島状の地形をなした可能性が考えられているが(赤木他 1993)、多くの場合は島として存在したと考えられる。

周辺は 1980 年代から宅地開発や運動場建設、道路工事に伴う発掘調査が行なわれており、縄文時代の遺跡としては、桂見遺跡(図 1-5)、布勢遺跡(図 1-7)

¹ 鳥取大学地域学部 〒 680-8551 鳥取市湖山町南 4-101

Fac. of Regional Sciences, Tottori Univ., 4-101, Koyama-Minami, Tottori 680-8551, Japan

E-mail : takata@rs.tottori-u.ac.jp

² 立命館大学大学院文学研究科 〒 603-8577 京都市北区等持院北町 56 - 1

Fac. of Letter, Ritsumeikan Univ., 56-1, Touji-in-Kita, Kyoto 603-8577, Japan

E-mail : kyt21175@lt.ritsumeikan.ac.jp

³ 安来市役所 〒 692-8686 鳥根県安来市安来町 878-2

Yasugi city office, 878-2, Yasugi, Shimane 692-8686

E-mail; nocturne.th@gmail.co

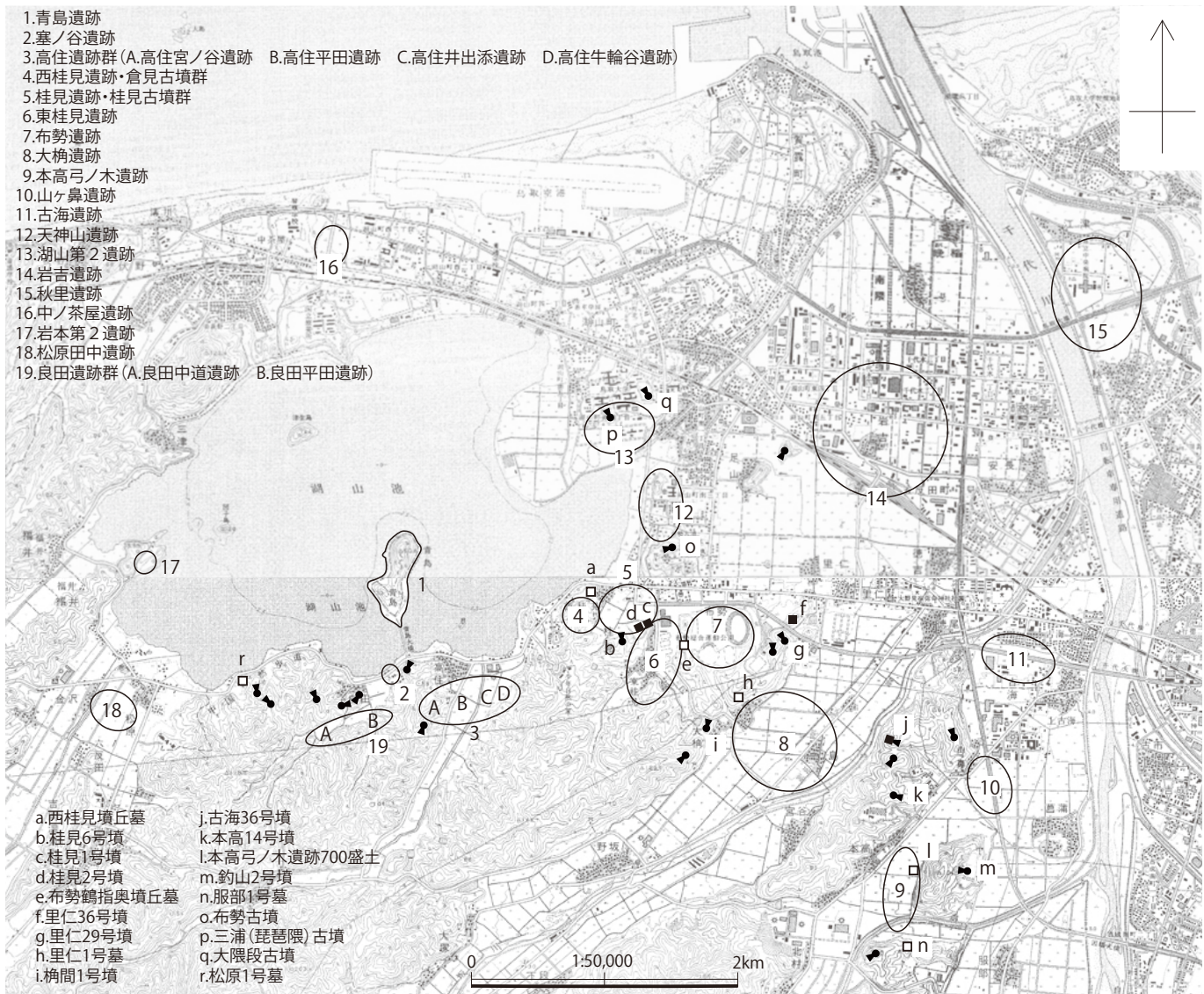


図1 青島遺跡と周辺の主な遺跡

がよく知られる。桂見遺跡では、前期末の大歳山式、中期末の北白川C式土器も報告されているが、主要な時期は後期以降にあり、布勢遺跡も同様である。布勢遺跡は、この地域の磨消縄文土器～縁帯文土器の成立過程を示す布勢式(久保1987)の名祖遺跡でもある。

近年では、山陰自動車道鳥取西道路の建設工事に伴って、湖山池南岸が広域に調査され、新たな縄文時代遺跡が知られるようになってきた。とりわけ、青島遺跡の南東側に位置する高住平田遺跡や高住井手添遺跡(図1-3B, C)でまとまった量の遺物が出土している。最も古い段階に早期前葉に位置付けられる押型文土器があり、前期前葉の羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅰa式段階の土器が出土した。従来この段階の遺物は、県内では米子市・目久美遺跡や同・鮎ヶ口遺跡など中西部の少数例にとどまっていた。また、中期初頭～前半の鷹島式・船元Ⅰ式段階の遺物が多く出土し、湖山

池南岸における定着的な人間活動が、従来の知見よりも早い段階で達成されている点が重要である。

桂見遺跡や東桂見遺跡(図1-6)の調査成果によると、縄文時代後期中葉～後葉にかけて、それまで存在していた潟湖の埋積が進み、縄文時代晩期には低湿地帯に変わる(高田2015)。このような土地環境の変化を受けて、弥生時代以降は、水稻農耕に有利な谷底平野の遺跡(大桝遺跡:図1-8, 本高弓ノ木遺跡:図1-9, 松原田中遺跡:図1-18)や、沖積平野の遺跡(岩吉遺跡:図1-14)に活動の中心が移る。青島遺跡の対岸に位置する高住では、かつて扁平鉾式流水文銅鐸が出土しており、弥生時代を通じて遺物も出土することから、ここにも農耕を基盤とした集団の存在を推測しうる。青島遺跡で出土する弥生土器も、そのような人々の活動の一部として理解できよう。

弥生時代後期になると、有力な墳丘墓が湖山池の南

岸地域に集中する。西桂見墳丘墓（図 1-a）をはじめ、布施鶴指奥墳丘墓（図 1-e）、里仁 1 号墓（図 1-h）、松原 10 号墓（図 1-r）などは、弥生時代における湖山池南岸地域が山陰地方の中心地の一つであり、様々な富や情報の集積地であった可能性を示唆している。

古墳時代には弥生時代のような中心性はなくなるものの、小規模ながら前方後円墳が比較的集中する地域であり、古代においても、山陰道と海上交通が交差する結節点となって、重要な地位を担った地域と考えられる（高尾 2015）。

2. 報告資料の由来と構成

本稿で紹介する遺物は、鳥取大学で長く保管されてきたもので、資料の総数（破片数）は 218 点ある。縄文土器が最も多く 168 点、弥生土器 19 点、土師器・須恵器 6 点、帰属時期不明の土器片 21 点がある。石器は、磨石や砥石と思われるもの、打製石鏃、扁平片刃石斧の 4 点がある。これらのうち、資料化した縄文土器と弥生土器 170 点あまりを中心に報告する。

資料は、注記の仕方大きく 2 群に分けることができ、墨によるものとポスターカラーによるものに分かれる。前者には、「昭和 17 年 6 月」等と記された石器などがあり、これらは、かつて県立図書館に寄贈され、のちに県立博物館に収蔵された資料と同じ日付、採集者の氏名が記されている。また、「昭和 26 年」の注記がなされた弥生土器広口壺片（図 5-30）には、「邑法一中郷土研究室」とある。

これらを所蔵するに至った経緯は不明だが、大学祭等の際に、学生サークルの歴史学研究会が展示を行なうことがあり、借用品が未返却のまま大学に残ったものと想像する。1960 年代半ばまで、鳥取大学学芸学部は旧国府町内にあり、邑法一中（現国府中学校）とは比較的近い距離にあった。

後者の注記には、アルファベットと数字の組合せの表記があり、鳥取大学所蔵の他の考古資料と共通する。青島遺跡の資料には F, O, T, U のアルファベットが使用されており、「F15」といった注記が施される²⁾。本稿で紹介する資料に関して興味深いのは、このような表記と並列して、「青島 001」のような、遺跡名と 3 桁の数字による注記が行なわれた破片が存在する点である。これは、県立博物館の考古資料の注記方法であるらしい。破片 8 点があり、それらがアルファベット注記の破片と接合する（図 2-7 など）。

県立博物館の注記方法を採用する土器片が鳥取大学にある理由はいくつか考えうるが、上記のようにかつての学生が借用したまま未返却の資料だったとする

と、本来は県立博物館所蔵品であり、それがアルファベット注記の鳥取大学所蔵資料と接合関係を持つということは、両者の極めて密接な関係を示すであろう。これらが県立博物館に集約されず、鳥取大学に保管されてきた理由は定かでないが、本来は一体的に理解すべき資料群であることは疑いない。

この点を踏まえると、本来、県立博物館所蔵資料³⁾と一体的に報告することが理想的であるが、紙幅の都合と整理の進捗状況により、鳥取大学所蔵資料のみ報告する。

3. 出土土器について

(1) 概要

鳥取大学所蔵青島遺跡出土土器は約 170 個体である。これを次のように分類する。

第 1 群 縄文中期の土器

- a 類 船元 I・II 式
- b 類 船元 III 式
- c 類 船元 IV 式
- d 類 里木 II 式
- e 類 北白川 C 式併行（中期末後期初頭のものを含む）
- f 類 縄文中期（細分困難）

第 2 群 縄文後期の土器

- a 類 中津式
- b 類 福田 K 2 式
- c 類 布勢式
- d 類 崎ヶ鼻 1 式
- e 類 崎ヶ鼻 2 式
- f 類 一乗寺 K 式・元住吉山 I 式
- g 類 元住吉山 II 式
- h 類 宮滝式
- i 類 縄文後期（細分困難）

第 3 群 縄文施文土器

第 4 群 縄文・条線施文土器

第 5 群 弥生土器

第 6 群 土器底部

第 3 群は縄文時代の土器に限られ、前面に縄文を施文する縄文中期の土器が多く含まれているとみてよい。第 4 群は弥生土器と判断できないものに限られるので多くは縄文土器であり、全面に条痕や条線を施文する縄文後期の土器が多く含まれているとみてよい。

第 1 群と第 2 群はおおむね同じ程度の量であり、縄文中期前葉の船元 I 式以降、縄文後期後葉の宮滝式までほぼ連続的に土器型式が確認できる。弥生土器は少数だが、比較的大きな破片が目立つ。数量的に見て、

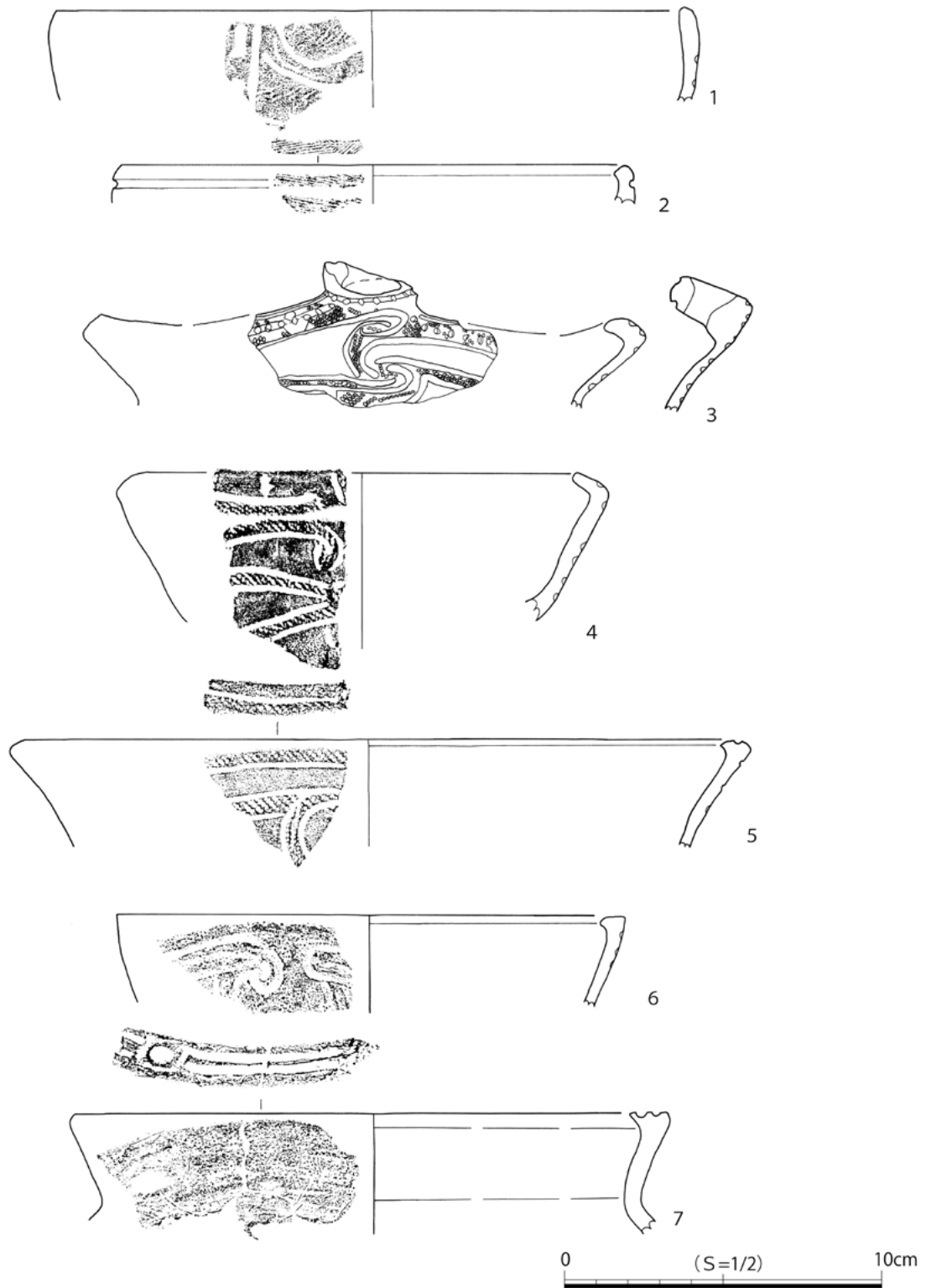


図2 青島遺跡出土土器 (1)

第6群の土器底部も多くは縄文土器と考えられるが、丸底があり、縄文晩期の土器や庄内式以降の土器も含まれている可能性がある。

これまで青島遺跡出土土器は縄文後晩期の土器や弥生土器、および須恵器や土師器が知られていた(小口2017, とっとり考古談話会1965・1967)。鳥取大学所

蔵資料には縄文後期と同程度の量の縄文中期の土器が含まれている点、従来知られていた資料とは異なる。従来知られていた縄文土器は1965・1966年の発掘調査(調査担当はとっとり考古談話会)の出土品が中心とみられるので、鳥取大学所蔵資料にはこれとは異なる地点から出土したものが含まれているのだろう、た

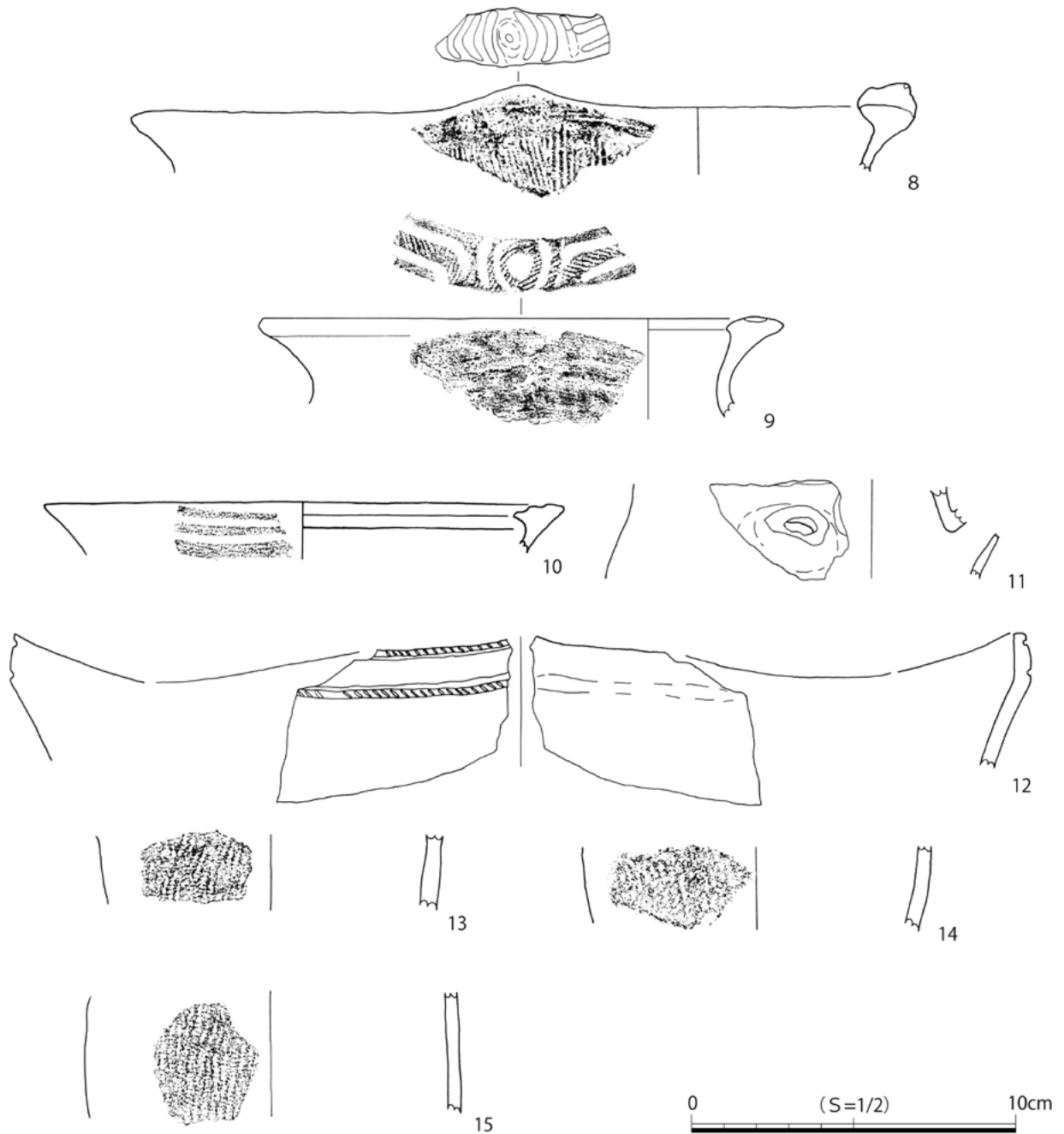


図3 青島遺跡出土土器 (2)

だし、縄文後期の土器については、従来知られていた時期のものとあまり変わらない。

(2) 第1群

a類 船元Ⅰ・Ⅱ式 (図 6-36～44・46～48) 36は地文に縦長で繊維痕の目立つ縄文が施され、微隆起線上に連続爪形文がみられる。幅10mmの半截竹管状工具を用いたと考えられる。右側の方が刺突が深い。37は波状口縁を呈し、I字形の刺突文と円形刺突文を施し、微隆起線上に爪形文がみられる。泉(2008)編年の船元Ⅰ式3期。38は微隆起線上に幅7mmの連続刺突文がみられる。39は口縁端部外面にアルカ属の貝

の圧痕をめぐらせている。40は外面にI字形の刺突文が施されている。泉編年の船元Ⅰ式3期。41は棒状工具による口縁端部の押圧で口縁が小波状になっている。42は2本の微隆起線上を楕円形に押圧している。43は波状口縁に沿って半截竹管状工具による沈線が施され、口縁端部には刻目、その直下にボタン状の添付文がみられる。44は器壁が非常に薄い。肥厚した口縁部を角状工具で左から右へ押し引いている。46は地文に縦長で繊維痕の目立つ縄文が施される。47は節の大きな縄文(R)が施文されている。48は繊維痕の目立つ縄文が施されている。

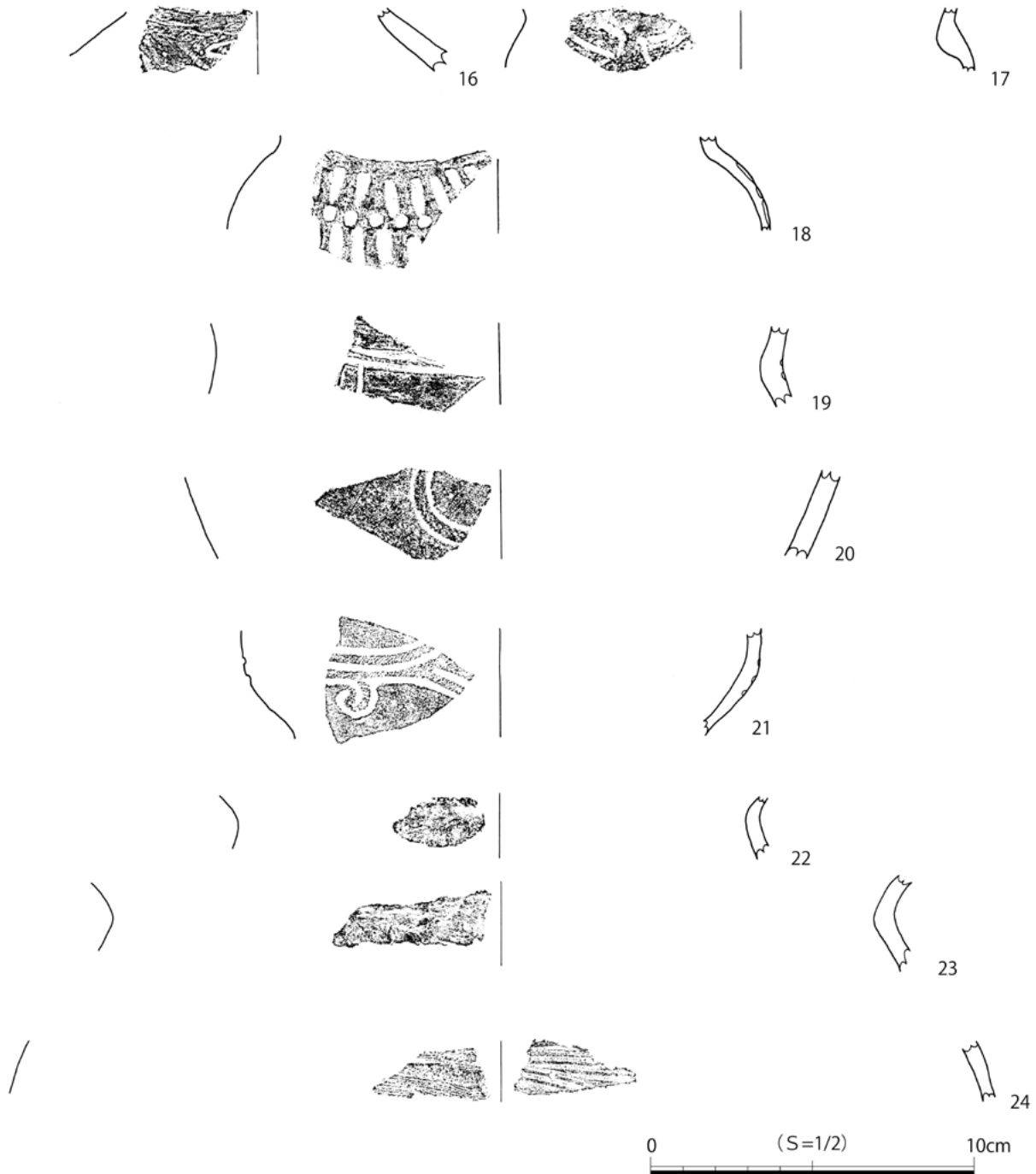


図4 青島遺跡出土土器(3)

37・40はI字形の文様から泉編年の船元I式3期に比定できる。41は端部刻みの特徴、43・44は口縁部の沈線の特徴、47は無節縄文の特徴から船元I式とみなしうる。38・39・42は断定しがたいが、船元I式か。36が隆帯上の爪形文と器形から泉編年の船元II式1期。46・48は判別困難。

b類 船元III式 (図4-18) 18は幅7mmの沈線の間には刺突がみられる。『里木貝塚報告』(間壁・間壁1971)の船元III式E類。

c類 船元IV式 (図6-45・49・58) いずれも条が1本おきに深くなる深浅縄文が施されているので船元IV式と判断した。45は口縁端部に深浅縄文が施され、平行沈線を基本とする三角形のモチーフがみられる。他はモチーフがわからないので確実ではない。

d類 里木II式 (図6-53～57, 図9-119, 図10-140) いずれも撚糸文が施されているので里木II式と判断した。深浅縄文が浅く施文されたものも含まれている可能性はある。

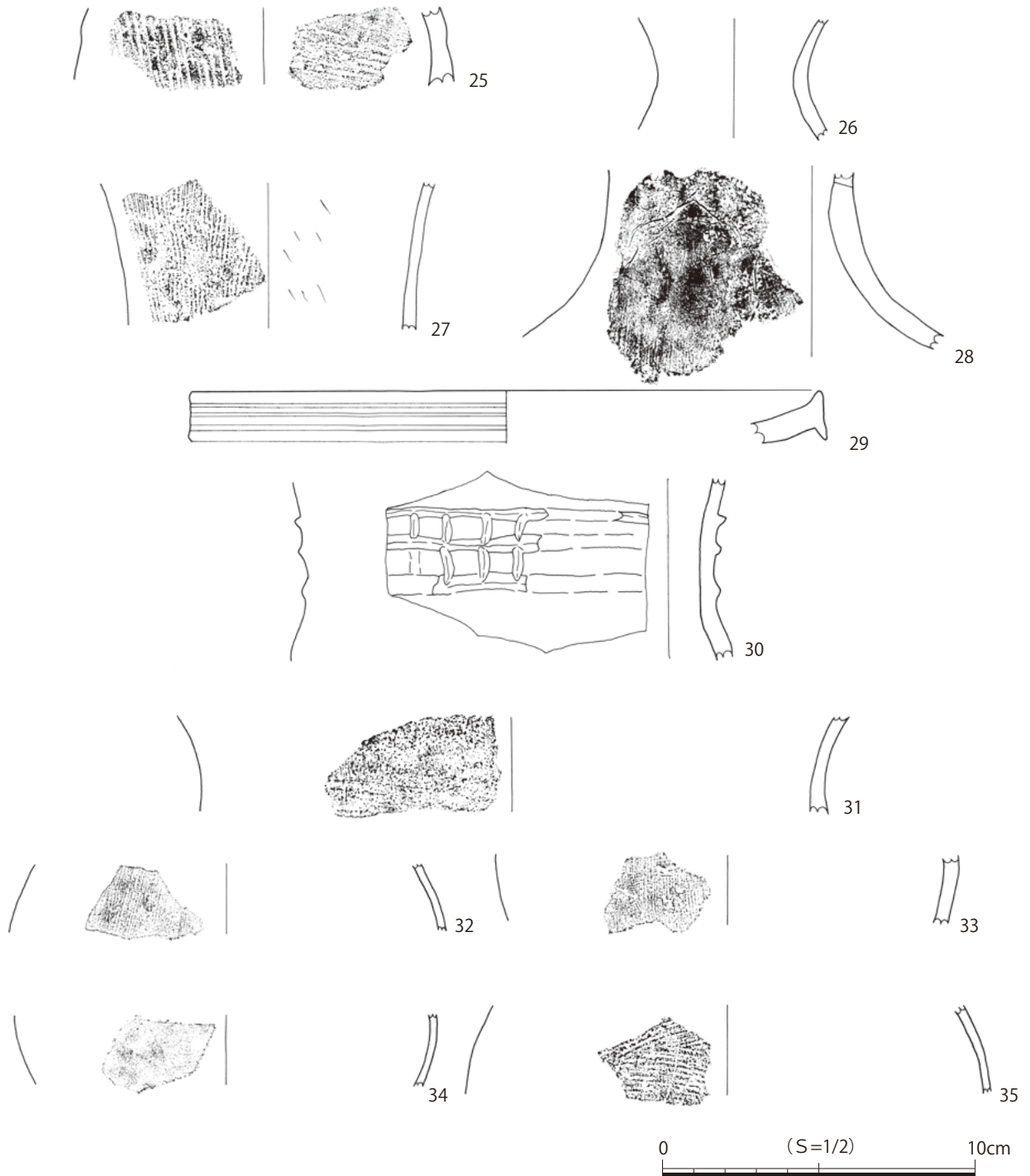


図5 青島遺跡出土土器 (4)

e類 北白川C式併行 (中期末後期初頭含む) (図2-1・2, 図7-60～73・77) 1の口縁部はやや内湾し, 口縁端部は少し肥厚する。沈線による区画内に縄文がみられ, 棒状工具による縦位刺突列が施されている。2の口縁部外面には横位の細かい条痕地に太い沈線が施されている。条痕は口縁端部に及ぶ。60は同一工具で口縁端部に刺突, 口縁部外面に沈線と刺突が施される。下方の沈線下部にも刺突がみられる。61は口縁

端部直下に幅6mmの2本の凹線, その間を同一工具による刺突がみられる。細かい条痕がみられる。62は口縁端部とその外面に縄文 (RL) が施される。63は口縁端部に縄文が施され, 口縁端部から沈線が垂下する。口縁部内面が肥厚する。64は口縁部内外面に条痕がみられる。口縁端部から凹線が垂下する。65は口縁端部に縄文 (LR) が施される。66は波状口縁を呈し, 2本の沈線間に刺突がみられる。67は波状口縁

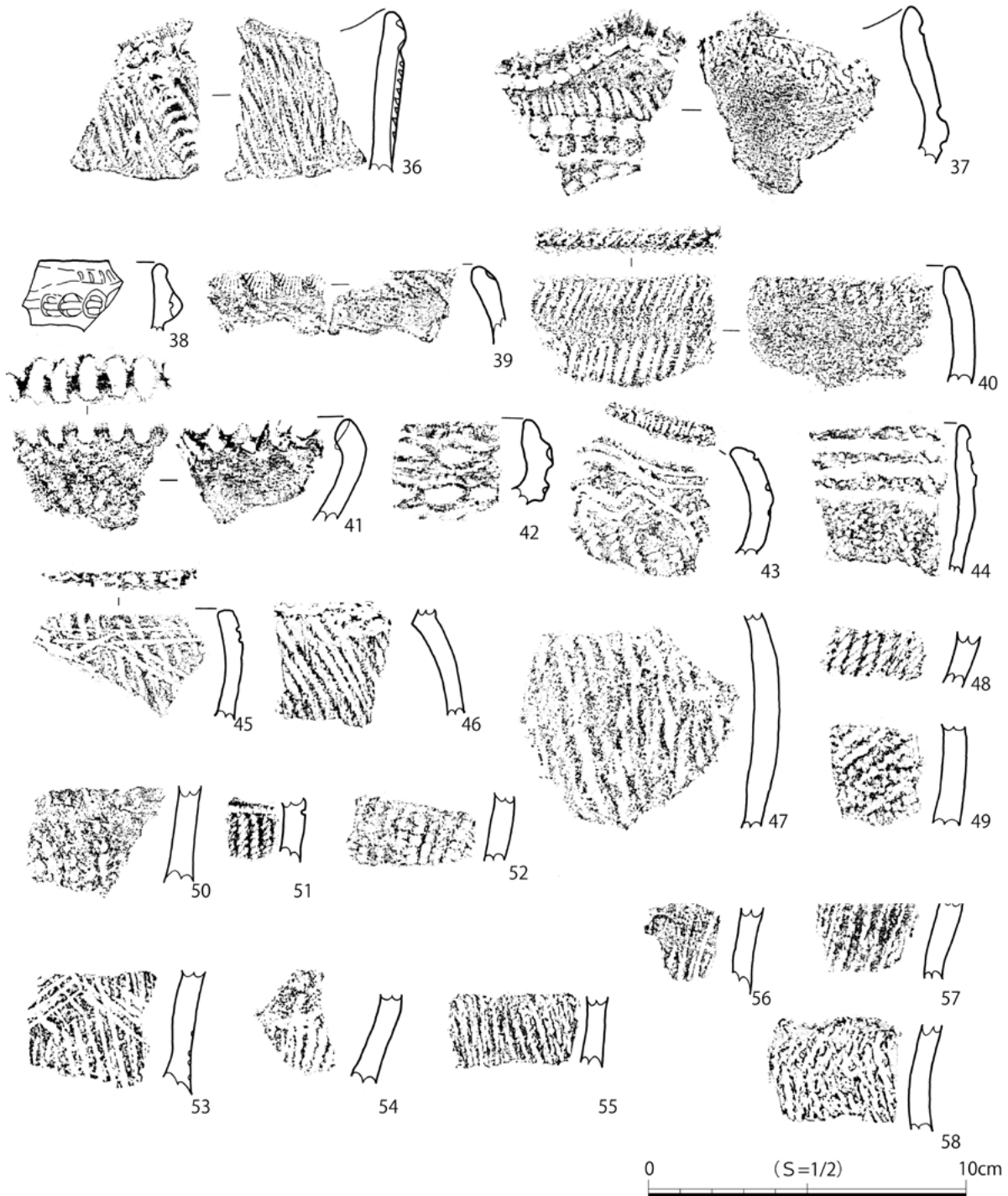


図6 青島遺跡出土土器(5)

を呈し、口縁端部に縄文(RL)を施す。口縁端部直下に波状文がみられる。68は縄文(RL)を施した後、2本の沈線が施される。69は波状口縁を呈し、口縁部に沿って2本の沈線がみられる。その下に刺突を充填する区画を有する。70は同様の刺突を充填する区画がみられる。71は縄文地に同様の区画を有する。72は2本の沈線内に刺突を加えている。73は縄文地に連続刺突列を有する。77は沈線で連弧文を描く。

2は中津式の可能性もある。他は北白川C式併行期。

60・61・66～68はその中でも新しいもの。

f類 縄文中期(細分困難)(図6-51, 図7-74) 51・74は船元式もしくは中期末。51は繊維がやや粗いので船元式か。

(3) 第2群

a類 中津式(図7-59・78) 59は口縁部が肥厚する。78は沈線による区画に縄文(LR)を施す。沈線内に刺突がみられる, 78は石田(2008)の「中1段階」である。

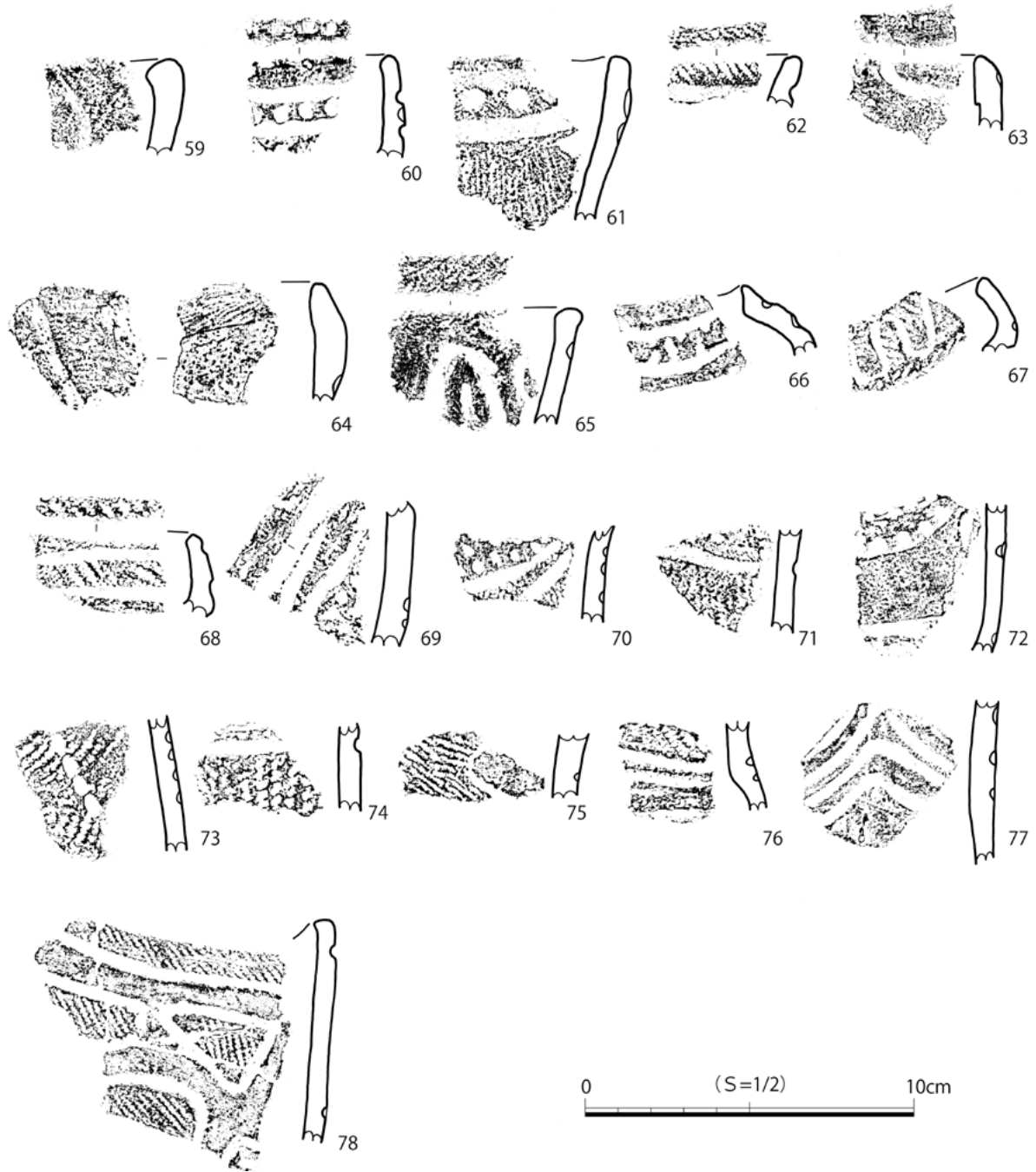


図7 青島遺跡出土土器 (6)

b類 福田K2式 (図2-3～5, 図4-20・21) 3の口縁部は「く」字形に屈曲しており、突起を有する。沈線内に刺突がみられる。3本1組ではなく、2本1組の沈線でモチーフを描く。4は浅鉢で、同じく2本1組の沈線でモチーフを描く。5も浅鉢かもしれない。20・21は布勢式の可能性もある。

21以外の4点は福田K2式に典型的な3本1組の沈線ではなく、2本1組の沈線でモチーフを描く。これは山陰地方など、福田K2式分布圏西部の特徴である。口縁部を見る限り、福田K2式の最も新しい段階、石田編年の「新3段階」に相当する。

c類 布勢式 (図2-6・7, 図3-8～10, 図4-17・19, 図8-80～83) 6は福田K2式に見られる3本1組の沈線でモチーフを描くが、モチーフの退化や縄文を消失していることから布勢式とみなしうる。7～10は口縁端部にモチーフを描く布勢式。8の外面は細密条痕。9の縄文は細かい。17は器形とモチーフから布勢式と判断した。摩耗が激しいが、磨消縄文とみられる。19は胴部のくびれに沿って2本の沈線が走る。モチーフから布勢式と判断した。

80～83は口縁端部外面が屈曲・肥厚する布勢式。80は細かい縄文地で、端部外面直下に口縁部に平行

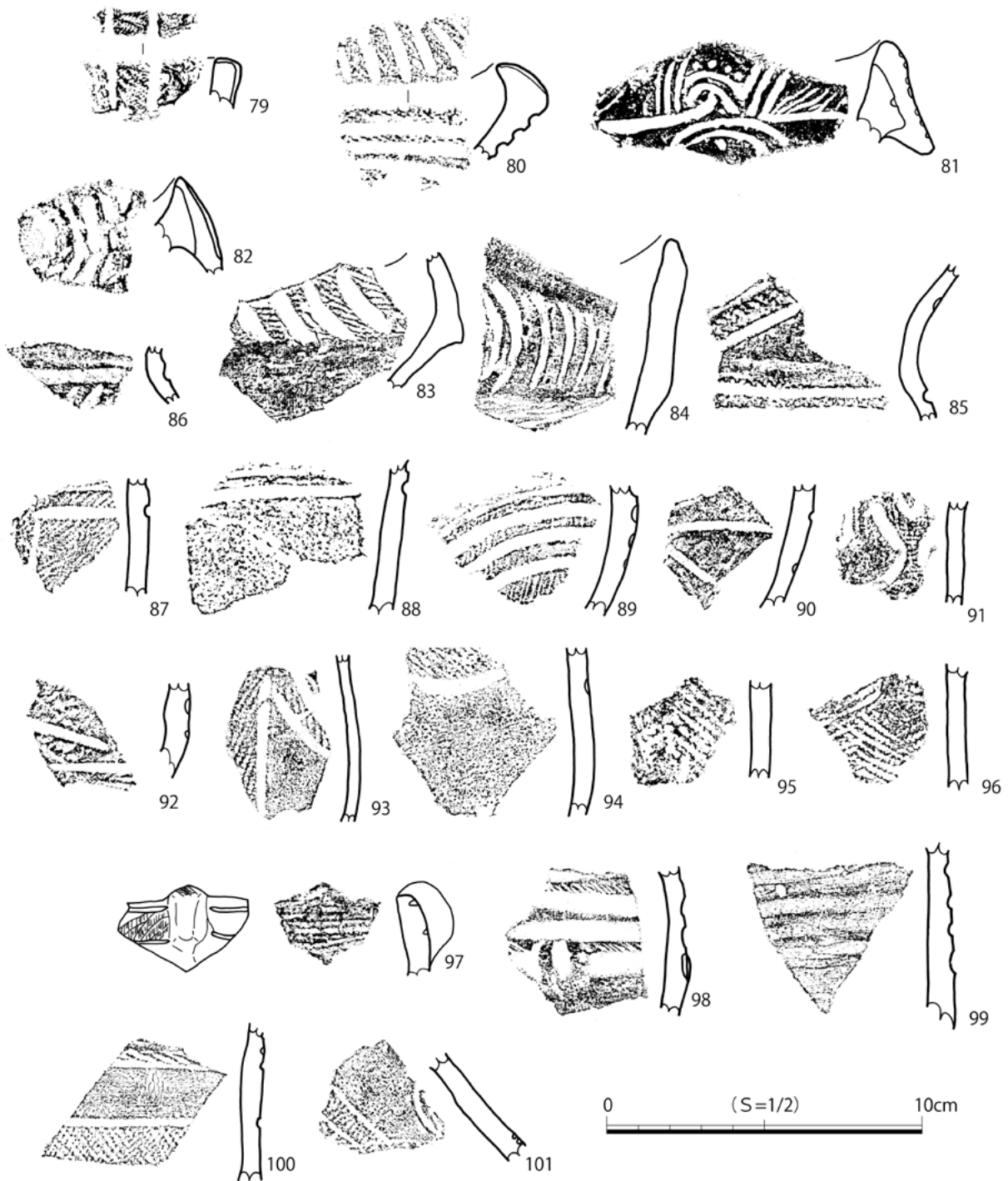


図8 青島遺跡出土土器 (7)

する3本の沈線がみられる。81は口縁端部外面に沈線と刺突でモチーフを描く。内面には2対のV字状沈線がみられる。82・83は口縁外面に弧線がめぐる。83は細かい縄文地。いずれも口縁形態とモチーフから布勢式と判断した。

d類 崎ヶ鼻1式(図8-84) 84は口縁外面が広くなり、弧線を重ねるモチーフを描く点から、崎ヶ鼻1式と判断した。

e類 崎ヶ鼻2式(図8-95・96) 95・96は胴部に羽状縄文が縦位に施されるので、崎ヶ鼻2式と判断した。

f類 一乗寺K式・元住吉山I式(図3-12, 図4-16, 図8-97・100・101) 12は典型的な元住吉山I式。波状口縁を呈し、屈曲する口縁の上端と下端に細かい刻目を施す。16は巻貝による擬縄文を施す注口土器。97は口端外面に2本の平行沈線間に縄文を施す。突起を貼付する。突起上端には縄文(RL)を施す。100



図9 青島遺跡出土土器 (8)

は上部の沈線間に刻目，下部の沈線間に縄文 (RL) を施す。101 は注口土器で，巻貝による擬縄文を施す。97・100 は一乗寺 K 式。

g 類 元住吉山 II 式 (図 8-98) 98 は幅 6 mm の凹線を 2 本 1 組で 2 段施し，各段とも凹線間に刻目を施す。楕円形の粘土貼付上面に巻貝側面を押圧する。凹線の幅が広く，凹線相互の間隔が狭いので，宮滝式に近い。

h 類 宮滝式 (図 8-99) 凹線間に刻目がないので宮滝式と判断した。

i 類 縄文後期 (細分困難) (図 3-11, 図 4-24, 図 7-75・76, 図 8-79・85～94, 図 10-156) 11 は注口土器。24 は外面横方向の細密条痕，内面横方向の二枚貝条痕から後期と判断したが不確定。75・76 はモチーフから見て後期と判断した。76 は 2 本 1 組の沈線を施す。

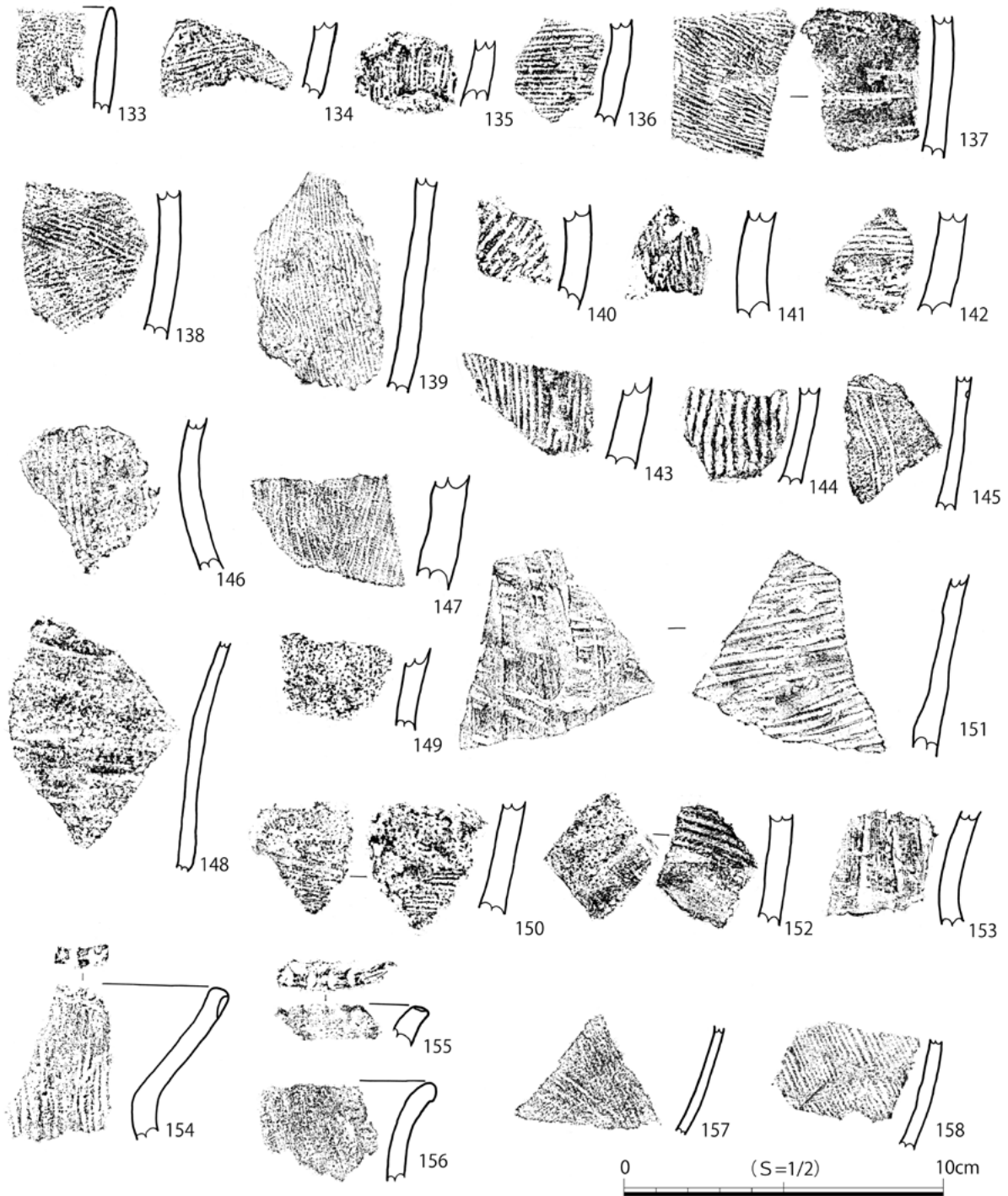


図10 青島遺跡出土土器 (9)

79 は中津式の可能性が高い。沈線間に節の細かい縄文を施す。85 は福田 K2 式か布勢式。86 は布勢式もしくは崎ヶ鼻式の胴部と頸部との境界か。87～89 はモチーフから布勢式もしくは崎ヶ鼻式の胴部片と判断した。87 と 89 には細密条痕がある。90～94 は文様モチーフから後期と判断した。90 は径 2.5 mm の沈線, 91 は径 4 mm の沈線, 93 は径 3 mm の沈線, 94 は径 4 mm

の沈線を施す。156 は口縁形態から後期と判断したが不確定。

(4) 第3～6群

第3群 縄文施文土器 (図 3-13～15, 図 6-50・52, 図 9-102～116・118, 図 10-144) 縄文施文土器で型式確定が困難なものを一括した。13～15 は条が縦方向になる点, 船元式に似る。102～106・108・111 も同様。

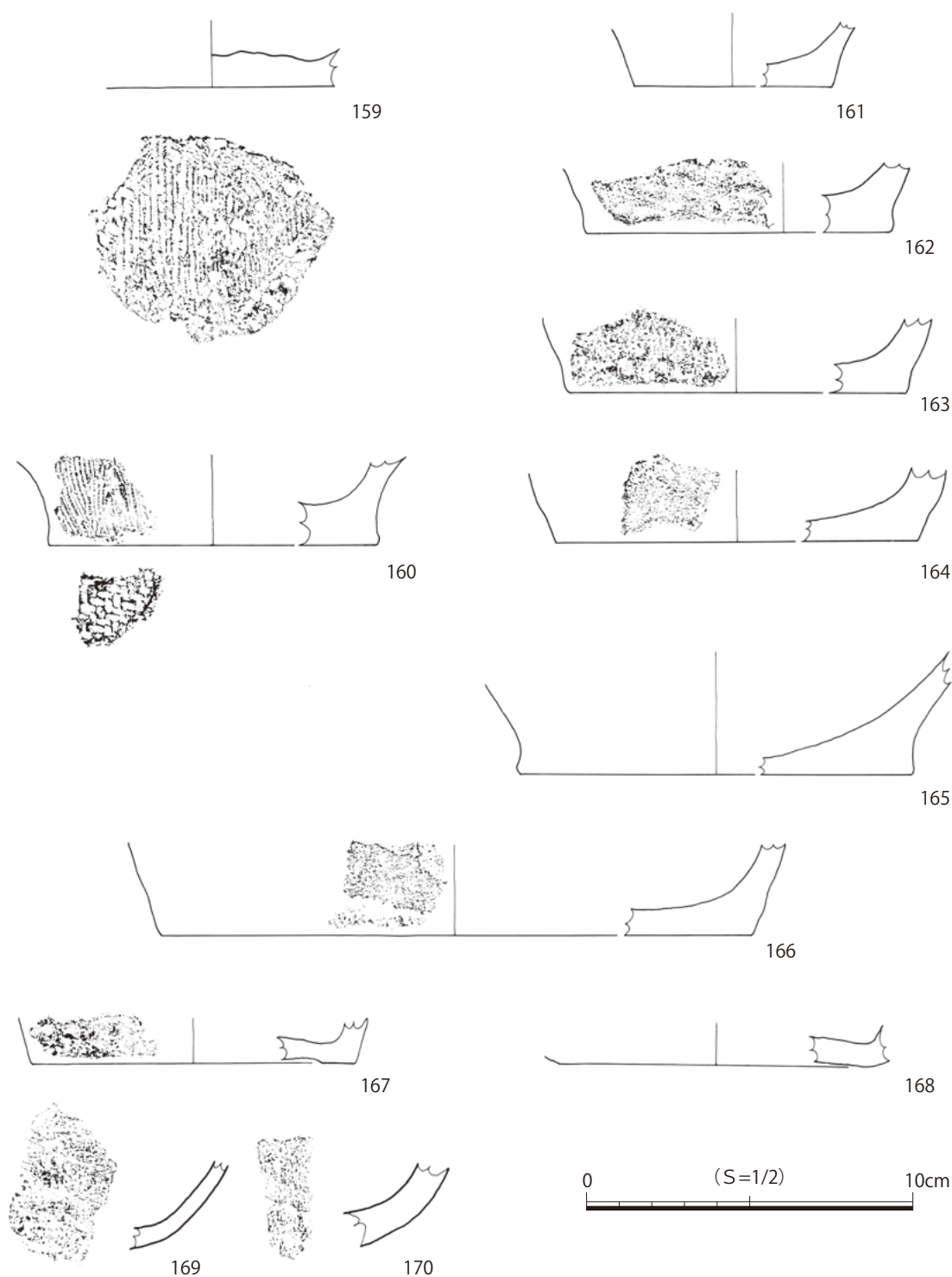


図 11 青島遺跡出土土器 (10)

113・114 は特に縄文が細かく、中期ではなく、後期のものだろう。

第4群 条痕・条線施文土器 (図 5-25, 図 9-117・120～132, 図 10-133～139, 141～143, 145～152) 弥生土器と判断できるものはすべて5群に含めたので、ここには縄文土器が多く含まれていると考えている。120・121 は条線を施すが、他は条痕を施す。25・

117・122～132・137, 150～152 は内外に条痕を施す。内面の条痕は横位か斜位に限られるが、外面の条痕は横位・斜位・縦位、様々である。条痕の幅は1 cm強のものも多く、2 cmを越えるものはない。1 cmあたりの条痕の本数は3～5本のは二枚貝条痕と判断できるものが多い。弥生土器にみられる「ハケメ」と同様のものは1 cmあたり5本以上のものがほとんどで、10

本を超えるものもある。

第5群 弥生土器 (図4-22・23, 図5-26～35, 図10-153～155・157・158) 22・23は器形から弥生土器の甕と判断した。前期か中期前葉か。26・27は壺の頸部。中期か。28は器台脚部。上部に円形の孔がある。後期か。29は中期後葉の壺口縁部。30は壺頸部。中期後葉か。31～35は甕胴部。31は前期もしくは中期前葉。32～35は中期以降のものだが、一部は土師器かもしれない。153は壺頸部か。154は弥生前期の甕か。155は口縁端部のみなので不確定だが、可能性は高い。157・158は土師器かもしれない。

第6群 底部 (図11-159～170) 159は底面を条痕で調整している。縄文土器だろう。160には2本越え・2本潜り・2本送りの網代痕がある。外面は条痕。縄文後期か。他の平底および凹み底は縄文土器か弥生土器か判断に迷う。169と170は丸底と判断できるものである。縄文時代のものならば縄文晩期以外には考えにくい。また、弥生時代以降ならば土師器になる。

(5) 縄文と条痕に関する考察

縄文と条痕に関しては観察表に計測値を掲載している。第1群a類の船元I・II式の縄文は10点中9点がRLで、そのRL縄文の条2本分の幅は5～13mmで平均8.4mmとなる。他の一つは無節で特殊なものなのでここでは除外する。第1群e類、すなわち北白川C式併行期の縄文は9点中RLが5点、LRが2点となり、両者の条2本分の幅は5～8mmで平均6.6mmとなり、約2mm程度幅が縮小する。

第2群a～c類、すなわち中津式・福田K2式・布勢式の縄文は11点中RLが9点、LR1点となり、RL9点の条2本分の幅は4～7mmで平均4.7mmとなる。LR1点はやや特殊な縄文なのでここでは除外する。中期末の北白川C式併行期より、さらに縄文の条2本分の幅が縮小する。

ここで計測した縄文はすべて単節2段撚りなので、条2本分の幅は原体の径の約3倍と考えてよい。すなわち、中期から後期前葉にかけて縄文の原体は細くなっている。

第3群の土器の縄文原体は条2本分の幅が8mmを越えるものが11点あり、それらはすべてRLである。これらの太い縄文は縄文後期のものとは考えにくく、基本的には縄文中期の船元I～Ⅲ式に相当する縄文である可能性が非常に高い。第3群の多くは縄文中期の船元I～Ⅲ式に相当するものではないか。

条痕については弥生土器とみなしたものは1cmあたり4本から14本の条痕がみられる。縄文土器とみなしたのものには1cmあたり3本から10本の条痕がみら

れる。やや縄文の方が本数が少ないものが多い傾向はあるものの、条痕だけから判断することは難しい。第4群は条痕だけからみれば、どちらとも言い難いものが多いということになる。

おわりに

鳥取大学所蔵の青島遺跡出土縄文土器の特徴として、縄文時代中期の土器が多く含まれる点を挙げうるだろう。土器型式も連続して大きな中断期がないことは、長期間の安定的な土地利用を示している。ここから派生して、いくつかの課題が浮かび上がる。同時期以前に遡る陸域の遺跡が見つかってきた近年の調査成果をも踏まえると、従来の後・晩期の遺跡としての理解を改めていく必要がある。鳥嶼としての地形利用の観点からも、各時期の遺跡の性格を再検討していく必要も考えられる。

また、土器の編年研究上の役割もまだ終わらない。小片が多く、遺跡での出土状況など不明な点が多い資料とはいえ、近年増加した資料群と対比的、補完的に評価する余地は大いにある。今後、県立博物館所蔵資料との一体的な再整理も必要と考える。

謝辞

本稿をなすにあたって、下記の方々、諸機関のお世話になった。とりわけ、鳥取県立博物館には資料借用など多くの便宜を図っていただいた。厚く御礼を申し上げる。

酒井雅代、東方仁史、湯村功、鳥取県立博物館、鳥取県立公文書館県史編さん室

注

- 1) 本稿の「3 出土土器について」は、矢野健一・馬上昌大・鈴木大輔が執筆した。図版と観察表は、著者3名と柳原麻子・高橋悠・妹尾一樹・橋本菜津美・山本雅俊・松原奈緒・渡邊裕穂・西山集・駒井翔・白石龍・三浦由槻・宮浦壺盛・藤原亮太が作成した。それ以外の部分は、高田健一が担当した。
- 2) この注記は、誰がどのような目的・意味で付したのか、不明である。鳥取大学卒業生で、鳥取県教育委員会の文化財担当職に就職した方々のうちのどなたかが、母校の収蔵資料を整理しようとしたのではないかと、との言説を聞いたことがあるが、その確認はできていない。
- 3) 県立博物館の青島遺跡出土資料は、登録済みの資料群と未登録の資料群の2群があり、前者はほとんど石器で126点を数える。一方後者は土器が中心で、100点以上の弥生土器、石器を含むが、全体で500点以上の縄文土器、石器が存在する。

引用・参考文献

- 赤木三郎・豊島吉則・星見清晴・谷村美弥子 1993 「湖山池の地質環境と地史の変遷」『地質学論集』第 39 号, pp.103-116
- 石田由紀子 2008 「中津式・福田 K II 式土器」小林達雄編『総覧縄文土器』アム・プロモーション, pp.634-641
- 泉 拓良 2008 「鷹島式・船元式・里木 II 式土器」小林達雄編『総覧縄文土器』アム・プロモーション, pp.502-509
- 梅原末治 1922 『鳥取県下に於ける有史以前の遺跡』鳥取県史蹟勝地調査報告第 1 冊
- 久保穰二郎 1987 「鳥取県下における後期前葉から中葉にかけての縄文土器の変遷について」『森藤第 1・森藤第 2 遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会, pp.46-50
- 小口英一郎 2017 「青島遺跡」『新鳥取県史 考古 1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県, pp.180-185
- とっとり考古談話会 1965 「青島の遺跡」『郷土と科学』11-1, 鳥取県立科学博物館, pp.1-11
- とっとり考古談話会 1967 「青島の遺跡 第二報」『鳥取郷土文化』1, pp.32-40
- 高尾浩司 2015 「古代因幡国における水運と地域支配」『錦織勤先生ご退職記念文集』錦織勤先生ご退職記念文集刊行会, pp.13-23
- 高田健一 2015 「鳥取平野における土地環境の変化と弥生集落の形成活動」『古代文化』第 67 巻第 1 号, pp.35-43
- 間壁忠彦・間壁直子 1971 『里木貝塚 倉敷考古館研究集報』7, 財団法人倉敷考古館

表 土器観察表

*1「縄文」は撚りと条2本分の幅,「条痕」は1cmあたりの条の本数を記す。

*2「胎土」は長石・石英以外に雲母含有をA,角閃石含有をA',どちらも含まないものをBとする。*3「+」は破片の接合関係を示す

図	No	分類	時代	時期・型式	器形	部位	縄文・条痕 (外面/内面) *1	調整(外面/内面)	色調 (外面/内面)	胎土*2	注記/備考*3
2	1	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢?	口縁部	縄文(LR,3mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	A'	U15・青島008
2	2	1群e	縄文	中期末後期初頭	深鉢?	口縁部	条痕(10本)/-	-/ナデ	灰褐/灰褐	B	青島O44
2	3	2群b	縄文	福田K2式	深鉢	口縁部	縄文(RL,5mm)/-	ミガキ/ミガキ	にぶい褐/黄灰	A	U1・青島001
2	4	2群b	縄文	福田K2式	浅鉢	口縁部	縄文(RL,5mm)/-	ミガキ/ミガキ	褐灰/褐灰	A	U6・青島004
2	5	2群b	縄文	福田K2式	浅鉢?	口縁部	縄文(RL,6mm)/-	ミガキ/ミガキ	褐灰/褐灰	A	U2・青島002
2	6	2群c	縄文	布勢式	浅鉢	口縁部	-/-	ナデ/ナデ	にぶい褐/にぶい褐	B	U9・青島
2	7	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	-/-	ナデ/ミガキ	灰黄褐/褐灰	A	U3・青島005+青島O38+U18+青島O61
3	8	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	条痕(6本)/-	-/ナデ	にぶい褐/黒褐	B	U23・青島
3	9	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	縄文(RL,4mm)/-	ナデ/ナデ	黒褐/にぶい褐	B	U4・青島006
3	10	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	-/-	-/-	灰黄褐/灰黄褐	B	青島042
3	11	2群i	縄文	後期	注口	胴部	-/-	ナデ/ナデ	にぶい褐/灰黄褐	B	青島07
3	12	2群f	縄文	元住吉山I式	深鉢	口縁部	-/-	ナデ/ナデ	褐灰/褐灰	A	U8・青島
3	13	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(LR,8mm)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/にぶい赤褐	B	T43
3	14	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/褐灰	A'	T13
3	15	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/黒褐	B	青島O25+青島O64
4	16	2群f	縄文	元住吉山I式	注口	頸部	擬縄文(巻貝)/-	ミガキ/ケズリ	灰黄褐/黄灰	A	青島O27
4	17	2群c	縄文	布勢式	深鉢	胴部	縄文(RL,7mm)/-	ナデ/ナデ	灰褐/灰黄褐	A	青島O51
4	18	1群b	縄文	船元Ⅲ式	深鉢	胴部	-/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	B	U20
4	19	2群c	縄文	布勢式	深鉢	頸部	-/-	ナデ	褐灰/灰黄褐	B	青島O33
4	20	2群b	縄文	福田K2式?	浅鉢?	胴部	縄文(RL)/-	ミガキ/ミガキ	灰/灰黄褐	A	青島O4
4	21	2群b	縄文	福田K2式?	浅鉢	胴部	縄文(LR,3mm)4条分撚り戻し?/-	ミガキ/ミガキ	黄灰/褐灰	A	U5・青島007
4	22	5群	弥生?	弥生?	甕?	頸部	-/-	ナデ/ナデ	灰黄褐/灰褐	B	F13
4	23	5群	弥生?	弥生?	甕?	頸部	-/-	ナデ/ケズリ	にぶい褐/にぶい褐	B	F12
4	24	2群i	縄文	後期?	深鉢	胴部	条痕(8本)/条痕(3本)二枚貝	-/-	にぶい褐/灰褐	B	T35
5	25	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(3本)二枚貝?/条痕(3本)二枚	-/-	灰黄褐/褐灰	A	T28/織鎌舎
5	26	5群	弥生	中期?	壺	頸部	-/条痕(5本/0.5cm)	ミガキ/ナデ	灰褐/褐灰	A	青島O59
5	27	5群	弥生	中期?	甕	胴部	条痕(5本)/-	-/ケズリ	灰黄褐/にぶい褐	B	
5	28	5群	弥生	後期?	器台	脚部	条痕(11本)/条痕(7本)	-/ナデ	灰褐/灰黄褐	A	O31/焼成前穿孔
5	29	5群	弥生	中期	壺	口縁部	-/-	-/-	にぶい黄橙/にぶい黄橙	A	V2
5	30	5群	弥生	弥生Ⅲ期	壺	頸部	-/-	-/-	灰褐/黄褐	B	昭和二六年六月二日青島出土 邑法一中郷土室
5	31	5群	弥生	中期	甕	頸部	条痕(11本)/条痕(12本)	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	B	T45
5	32	5群	弥生	-	甕	胴部	条痕(10本)/-	-/-	褐灰/褐灰	A	F8
5	33	5群	弥生	-	甕	胴部	条痕(7本)/-	-/-	灰黄褐/灰褐	B	T12
5	34	5群	弥生	-	甕	胴部	条痕(8本)/-	-/ナデ	褐灰/灰黄褐	B	T20
5	35	5群	弥生	-	甕	胴部	条痕(5本)/-	-/ケズリ	褐灰/にぶい褐	B	F19
6	36	1群a	縄文	船元Ⅱ式	深鉢	口縁部	縄文(RL,8mm)/縄文(RL,8mm)	-/-	にぶい黄橙/褐灰	B	U13・青島
6	37	1群a	縄文	船元Ⅰ式	深鉢	口縁部	-/縄文(RL,8mm)	-/ナデ	褐灰/暗灰	B	注記なし(U36?)
6	38	1群a	縄文	船元Ⅰ式?	深鉢	口縁部	-/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	B	青島O43
6	39	1群a	縄文	船元Ⅰ式?	深鉢	口縁部	-/-	-/ナデ	灰黄褐/にぶい黄橙	B	青島O1
6	40	1群a	縄文	船元Ⅰ式	深鉢	口縁部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	にぶい黄橙/にぶい褐	B	U28・青島
6	41	1群a	縄文	船元Ⅰ式	深鉢	口縁部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/黒褐	A	D12・青島
6	42	1群a	縄文	船元Ⅰ式?	深鉢	口縁部	縄文(RL,5mm)/-	-/ナデ	灰褐/灰褐	B	U40・青島
6	43	1群a	縄文	船元Ⅰ式	深鉢	口縁部	縄文(RL,13mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/にぶい赤褐	A	U3(U31?)・青島
6	44	1群a	縄文	船元Ⅰ式	深鉢	口縁部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	A	D84・青島
6	45	1群c	縄文	船元Ⅳ式	深鉢	口縁部	縄文(RL,10mm)深浅/-	-/ナデ	にぶい褐/灰黄	B	U39・青島
6	46	1群a	縄文	船元Ⅰ・Ⅱ式	深鉢	胴部	縄文(RL,7mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/褐灰	B	青島O19
6	47	1群a	縄文	船元Ⅰ式	深鉢	胴部	縄文(R,15mm)/-	-/ナデ	褐灰/褐灰	A	U22
6	48	1群a	縄文	船元Ⅰ・Ⅱ式	深鉢	胴部	縄文(RL,9mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/にぶい褐	B	T37
6	49	1群c	縄文	船元Ⅳ式?	深鉢	胴部	縄文(RL,5mm)深浅/-	-/ナデ	灰褐/灰褐	A	F16
6	50	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,12mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	A	F48
6	51	1群f	縄文	中期	深鉢	胴部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	にぶい黄褐/灰黄褐	A	F10
6	52	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	灰褐/にぶい褐	B	F34
6	53	1群d	縄文	里木Ⅱ式	深鉢	胴部	擦糸文(R,5mm)/-	-/ナデ	灰褐/灰黄褐	A	青島O57
6	54	1群d	縄文	里木Ⅱ式	深鉢	胴部	擦糸文(L,7mm)/条痕(5本)	-/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	B	F7
6	55	1群d	縄文	里木Ⅱ式	深鉢	胴部	擦糸文(L,7mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/にぶい黄橙	A	T6
6	56	1群d	縄文	里木Ⅱ式	深鉢	胴部	擦糸文(R,6mm)/-	-/ナデ	灰褐/にぶい黄橙	A	F41
6	57	1群d	縄文	里木Ⅱ式	深鉢	胴部	擦糸文(R,8mm)/-	-/ナデ	にぶい黄橙/灰黄褐	A	T11
6	58	1群c	縄文	船元Ⅳ式?	深鉢	胴部	縄文(LR+R,10mm)深浅/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	A	青島O58
7	59	2群a	縄文	中津式	深鉢	口縁部	縄文(RL,6mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	A	F44
7	60	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	-/-	ナデ/ナデ	にぶい褐/灰黄褐	B	青島O23
7	61	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	条痕(6本)/条痕(10本)	-/-	にぶい褐/にぶい赤褐	A	青島O52
7	62	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	縄文(RL,5mm)/-	-/-	褐灰/	A	F33
7	63	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	端部縄文/-	ナデ/ナデ	灰褐/褐灰	A	青島O53
7	64	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	条痕(8本)/条痕(10本)	-/ナデ	黄灰/灰褐	B	U41
7	65	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	端部縄文(RL,6mm)/条痕(10本)	ナデ/ナデ	灰褐/褐灰	A	青島O12

図	No	分類	時代	時期・型式	器形	部位	縄文・条痕(外面/内面) ^{*1}	調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	胎土 ^{*2}	注記/備考 ^{*3}
7	66	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	端部縄文(RL,7mm)/-	ナデ/ナデ	褐灰/灰褐	B	U30
7	67	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	縄文(RL,6mm)/-	ナデ/ナデ	にぶい褐/灰褐	A	U44
7	68	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/にぶい赤褐	B	青島O48
7	69	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	口縁部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/褐	B	青島O60
7	70	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	胴部	縄文(RL,6mm)/-	ナデ/ナデ	灰褐/灰黄褐	B	青島O45
7	71	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	胴部	縄文(LR,6mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/褐	B	T30
7	72	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	胴部	-/	ナデ/ナデ	にぶい赤褐/にぶい褐	A	青島O20
7	73	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	胴部	縄文(LR,6mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	A	青島O6
7	74	1群f	縄文	中期	深鉢	胴部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	B	青島O50
7	75	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	縄文(RL,5mm)/条痕(5本)	-/	褐/褐	B	F32
7	76	2群i	縄文	後期	深鉢	頸部	縄文(RL,8mm)/条痕(3本)	-/ナデ	灰褐/灰褐	B	青島O11
7	77	1群e	縄文	北白川C式併行	深鉢	胴部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/灰褐	B	U19
7	78	2群a	縄文	中津式	深鉢	口縁部	縄文(RL,4mm)/-	ナデ/ミガキ	灰褐/灰褐	B	U11+U21
8	79	2群i	縄文	後期前葉	深鉢	口縁部	縄文(LR,3mm)/-	-/ナデ	灰褐/灰褐	A	T21/内外面に赤色顔料
8	80	2群c	縄文	布勢式	浅鉢?	口縁部	縄文(RL,5mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/褐灰	B	U38
8	81	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/黄灰	A	U10
8	82	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	-/	-/ナデ	灰黄褐/にぶい橙	B	U43
8	83	2群c	縄文	布勢式	深鉢	口縁部	縄文(L,5mm)/-	ミガキ/ナデ	褐灰/黒褐	A	U16
8	84	2群d	縄文	崎ヶ鼻1式	深鉢	口縁部	-/	ナデ/ナデ	黄灰/灰褐	A	U35
8	85	2群i	縄文	福田K2式・布勢式	深鉢	頸部	縄文(RL,6mm)/-	ナデ/ナデ	褐灰/褐灰	B	青島O47
8	86	2群i	縄文	後期	深鉢	頸部	-/	ナデ/ナデ	褐灰/黒褐	A	青島O8
8	87	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	条痕(6本)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/黒褐	A	青島O62
8	88	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/にぶい赤褐	B	青島O9
8	89	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	条痕(6本)/-	-/ナデ	にぶい褐/褐灰	B	U27
8	90	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	-/	ナデ/ナデ	にぶい赤褐/にぶい褐	A	F43
8	91	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	縄文(RL,3mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	B	青島O54
8	92	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	縄文/-	-/ナデ	にぶい黄褐/褐灰	A	F52
8	93	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	縄文(RL,5mm)/-	ナデ/ナデ	灰褐/褐灰	B	青島O24
8	94	2群i	縄文	後期	深鉢	胴部	縄文(RL,4mm)/-	ナデ/ナデ	褐灰/灰褐	B	青島O39
8	95	2群e	縄文	崎ヶ鼻2式?	-	胴部	縄文(LR,7mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/褐灰	A	F18
8	96	2群e	縄文	崎ヶ鼻2式?	-	胴部	縄文(LR,6mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	A	青島O2
8	97	2群f	縄文	一乗寺K式	-	口縁部	縄文(L,4mm)/条痕(5本)	-/	褐灰/褐灰		U47・青島
8	98	2群g	縄文	元住吉山Ⅱ式	深鉢	胴部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/灰褐	B	U33
8	99	2群h	縄文	宮滝式	深鉢	胴部	-/	-/ナデ	灰褐/灰黄褐	A	青島O28
8	100	2群f	縄文	一乗寺K式	深鉢	胴部	縄文(RL,5mm)/-	-/ナデ	褐灰/褐灰	B	青島O3
8	101	2群f	縄文	元住吉山Ⅰ式	注口	胴部	擬縄文(巻貝)/-	ナデ/ナデ	灰黄褐/黄灰	B	青島O18
9	102	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	にぶい黄橙/灰黄褐	A	T10
9	103	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,12mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/褐	A	U32
9	104	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,8mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/にぶい褐	A	F35
9	105	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/褐灰	A	青島O46
9	106	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/にぶい黄橙	A	青島O40
9	107	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,9mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/黄灰	A	F46
9	108	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,9mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	B	F27
9	109	3群	縄文	-	-	胴部	縄文(LR,8mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰黄褐	B	U49
9	110	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL11mm)/-	-/ナデ	灰褐/褐灰	B	青島O10
9	111	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,10mm)/-	-/ナデ	灰褐/灰黄褐	B	F23
9	112	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(LR,7mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	A	T42
9	113	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(LR,5mm)/-	-/ナデ	にぶい黄褐/にぶい黄橙	A	F42
9	114	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,4mm)/-	-/ナデ	にぶい褐/にぶい褐	B	T23
9	115	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL,9mm)/-	-/ナデ	にぶい黄橙/にぶい黄褐	A	F56
9	116	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(RL)/-	-/ナデ	にぶい褐/にぶい褐	B	F53
9	117	4群	縄文	-	浅鉢	口縁部	条痕/条痕	-/	にぶい褐/黄灰	A	U42
9	118	3群	縄文	-	深鉢	胴部	縄文(LR,6mm)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/灰黄褐	B	F38
9	119	1群d	縄文	里木Ⅱ式	深鉢	胴部	擦糸文(L,5mm)/-	-/ナデ	にぶい黄橙/にぶい黄橙	B	T25
9	120	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条線/-	-/ナデ	にぶい赤褐/にぶい赤褐	B	青島O32
9	121	4群	縄文	-	深鉢	口縁部	条痕(7本)/条痕(8本)	-/	にぶい褐/灰褐	B	青島O37
9	122	4群	縄文	-	深鉢	口縁部	条痕(7本)/条痕(8本)	-/	にぶい褐/灰褐	B	U46+U48+T40
9	123	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(5本)/条痕(6本)	-/	灰褐/灰褐	B	青島O36
9	124	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(8本)/条痕(8本)	-/	灰褐/灰黄褐	A	T38
9	125	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(6本)/条痕(6本)	-/	黄灰/にぶい褐	B	F23
9	126	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(7本)/条痕(7本)	-/	にぶい褐/灰黄褐	B	F20
9	127	4群	縄文	-	浅鉢	胴部	条痕(4本)/条痕(4本)	-/	にぶい橙/灰黄褐	B	F15
9	128	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(4本)	-/	にぶい褐/灰黄褐	B	F17
9	129	4群	縄文	-	深鉢	頸部	条痕(4本)二枚貝/条痕(4本)二枚貝	-/	灰褐/灰褐	B	F29
9	130	4群	縄文	-	浅鉢	胴部	条痕(6本)/条痕(5本)	-/	にぶい褐/褐灰	B	T2
9	131	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(4本)二枚貝/条痕(4本)二枚貝	-/	にぶい橙/にぶい褐	B	T33
9	132	4群	縄文	-	浅鉢	胴部	条痕(5本)二枚貝/条痕(5本)二枚貝	-/	灰黄褐/褐	A	T16
10	133	4群	縄文	-	深鉢	口縁部	条痕(9本)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	B	F47
10	134	4群	縄文	-	深鉢	胴部	条痕(6本)/-	-/ナデ	にぶい黄褐/灰黄褐	B	F58

図	No	分類	時代	時期・型式	器形	部位	縄文・条痕(外面/内面) ^{*1}	調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	胎土 ^{*2}	注記/備考 ^{*3}	
10	135	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(8本)/-	-/ナデ	にぶい黄褐/にぶい黄褐	B	F6	
10	136	4群	縄文	-	-	深鉢	胴部	条痕(6本)/-	-/ナデ	にぶい黄褐/にぶい褐	B	T9
10	137	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(10本)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/灰褐	B	T41	
10	138	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(6本)/-	-/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	A	T29	
10	139	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(9本)/-	-/ナデ	褐/にぶい褐	A	T36	
10	140	1群d	縄文	里木Ⅱ式	浅鉢	胴部	撚糸文(L?, 7mm)	-/ナデ	灰褐/灰褐	B	F39	
10	141	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(8本)/-	-/ナデ	にぶい赤褐/灰褐	A	F49	
10	142	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(5本)/-	ナデ/ナデ	灰黄褐/褐灰	A	F37	
10	143	4群	縄文	-	-	胴部	条痕(5本)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰黄褐	B	F21	
10	144	3群	縄文	-	-	深鉢	胴部	縄文(LかLR, 8mm)/-	-/ナデ	灰黄褐/にぶい黄橙	A	T5
10	145	4群	-	-	-	胴部	条痕(6本)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰黄褐	B	F50	
10	146	4群	-	-	-	頸部	条痕(5本)/-	-/ナデ	黒褐/灰褐	A	T17	
10	147	4群	-	-	-	胴部	条痕(5本)/-	-/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	A	T24	
10	148	4群	縄文	-	-	深鉢	胴部	-/	ナデ/ナデ	褐灰/灰褐	B	F2
10	149	4群	-	-	-	胴部	条痕/-	ナデ/ナデ	にぶい褐/にぶい褐	A	F40	
10	150	4群	縄文	-	-	深鉢	胴部	条痕/条痕(7本)	-/	灰褐/にぶい褐	B	T47
10	151	4群	縄文	-	-	深鉢	胴部	-/条痕(5本)	ナデ/-	灰褐/灰褐	A	T27
10	152	4群	縄文	-	-	深鉢	胴部	-/条痕(4本)	ナデ/-	にぶい褐/にぶい黄褐	A	T14
10	153	5群	弥生	-	-	壺?	頸部	条痕(14本)/条痕(13本)	-/	灰黄褐/にぶい褐	B	F24
10	154	5群	弥生	前期?	-	甕	口縁部	条痕(5本)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	B	U37
10	155	5群	弥生?	-	-	甕?	口縁部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/褐灰	B	F59
10	156	2群i	縄文?	後期?	-	深鉢?	口縁部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/にぶい褐	B	U45
10	157	5群	弥生?	-	-	甕	胴部	条痕(4本)/-	-/ケズリ	灰黄褐/にぶい褐	B	F22
10	158	5群	弥生?	-	-	胴部	条痕(5本)/-	-/ナデ	灰褐/にぶい赤褐	A	T15	
11	159	6群	縄文	-	-	深鉢	底部	条痕(6本)/-	-/ナデ	灰黄褐/にぶい褐	A	T46
11	160	6群	縄文	-	-	深鉢	底部	条痕(9本)/-	-/ナデ	にぶい褐/灰褐	A	T7/網代底
11	162	6群	-	-	-	深鉢	底部	-/	ケズリ/ナデ	にぶい黄褐/	B	F11
11	163	6群	-	-	-	深鉢	底部	条痕/-	-/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	A	F5
11	164	6群	-	-	-	深鉢	底部	-/	ナデ/ナデ	にぶい褐/灰黄褐	A	F9
11	165	6群	-	-	-	深鉢	底部	-/	ナデ/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	B	U14
11	166	6群	-	-	-	深鉢	底部	-/	ナデ/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	B	F1
11	167	6群	-	-	-	深鉢	底部	-/	ナデ/ナデ	灰黄褐/灰黄褐	A	F3
11	168	6群	-	-	-	深鉢	底部	-/	ナデ/ナデ	灰褐/灰褐	A	F60
11	169	6群	-	-	-	-	底部	-/	ナデ/ナデ	にぶい褐/灰褐	B	F30
11	170	6群	-	-	-	-	底部	-/	ナデ/ナデ	黄灰/褐灰	B	F54